1）性　別　　1. 男　2. 女
2）調査時年齢　　1. 満（　　）歳　2. 不明
3）最終学歴　　1. 小学校　2. 中学校　3. 高校　4. 専門学校　5. 短大　6. 大学　7. 不明
4）在学・卒業の別　　1. 在学中　2. 中退　3. 卒業　4. 不明
5）職　歴　　1. 乱用前職業（　　），不明　2. 現在の職業（　　），不明
（下記のコード番号を記入。【例】主婦：29，無職：31，暴力団員の場合は無職を含め日常的業種を選択）

01. 農林漁業　02. 商人（卸・小売り）　03. 不動産業　04. 金融業　05. 自営の職人　06. 露天・行商　07. その他の自営業
08. 団体役員　09. 会社員　10. 店員　11. 工員　12. 公務員　13. 風俗営業関係者　14. 風俗営業以外の飲食業関係者
15. 興業関係者　16. 旅館業関係者　17. 交通運輸業関係者　18. 土木建築業関係者　19. 日雇い労働者
20. その他の被雇用者　21. 医療薬業関係者　22. 芸能関係者　23. 船員　24. 小学生　25. 中学生　26. 高校生　27. 大学生
28. 各種学校生　29. 主婦　30. 家事手伝い　31. 無職　32. 不定　33. 不明　34. その他

6）薬物乱用開始前の交友関係
　暴力団との関係　　1. あり　2. なし　3. 不明
　非行グループとの関係　　1. あり　2. なし　3. 不明
　薬物乱用者（友人・知人）との関係　　1. あり　2. なし　3. 不明
　医療関係者（友人・知人）との関係　　1. あり　2. なし　3. 不明
7）薬物乱用開始後の交友関係
　暴力団との関係　　1. 現在もあり　2. 乱用開始後にあったが現在はなし　3. なし　4. 不明
　非行グループとの関係　　1. 現在もあり　2. 乱用開始後にあったが現在はなし　3. なし　4. 不明
　薬物乱用者（友人・知人）との関係　1. 現在もあり　2. 乱用開始後にあったが現在はなし　3. なし　4. 不明
　医療関係者（友人・知人）との関係　1. 現在もあり　2. 乱用開始後にあったが現在はなし　3. なし　4. 不明
8）薬物乱用開始前の補導・逮捕歴　　1. あり　2. なし　3. 不明
9）薬物乱用開始後の補導・逮捕歴　　1. あり　2. なし　3. 不明
10）現在の配偶関係　　1. 未婚　2. 同棲　3. 内縁　4. 既婚　5. 別居　6. 離婚　7. 死別
　8. 再婚　9. その他（　　）　10. 不明
11）「主たる薬物」1つ（現在の精神科的症状に関して，臨床的に最も関連が深いと思われる薬物）を選択。
（複数の薬物が同程度に関与していると考えられる場合は複数選択して下さい。）
　1. 覚せい剤　2. 有機溶剤　3. 睡眠薬　4. 抗不安薬　5. 鎮痛薬　6. 鎮咳薬
　7. 大　麻　8. コカイン　9. ヘロイン　10. その他（　　）
12）これまでの薬物使用歴について（例）にならって記入して下さい。ただし治療で用いた薬物は除きます。
（「使用の有無*」「方法**」は下欄から該当する番号を選択して下さい。「年齢」が不明の場合は「99」と記入して下さい。）

	【これまで】	【初回使用時】		【過去1年間】		【過去1ケ月間】		最終使用年齢
	使用の有無*	年齢	方法**	使用の有無*	方法**	使用の有無*	方法**	
(例) 覚せい剤	*(1)*	*(19)*	*(2)*	*(1)*	*(4, 2)*	*(2)*	*(　　)*	*(23)*
(1) 覚せい剤	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
(2) 有機溶剤	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
＊有機溶剤：薬物名；ｼﾝﾅｰ，ﾄﾙｴﾝ，ﾗｯｶｰ，ﾎﾞﾝﾄﾞ，ｶﾞｽ類，その他（＿＿＿＿＿＿）								
(3) 睡眠薬	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
＊睡眠薬：薬剤名（＿＿＿＿＿＿）								
(4) 抗不安薬	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
＊抗不安薬：薬剤名（＿＿＿＿＿＿）								
(5) 鎮痛薬	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
＊鎮痛薬：薬剤名（＿＿＿＿＿＿）								
(6) 鎮咳薬	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
＊鎮咳薬：薬剤名（＿＿＿＿＿＿）								
(7) 大　麻	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
(8) コカイン	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
(9) ヘロイン	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
(10) その他	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)	(　　)
＊その他：薬物名（＿＿＿＿＿＿）								

「使用の有無*」　1. あり　2. なし　3. 不明
「方法**」　1. 経口　2. 静注　3. 吸引（主に有機溶剤）　4. 吸煙（加熱吸引：火であぶって吸引すること。特にｺｶｲﾝ・ｸﾗｯｸ，最近の覚せい剤）　5. 喫煙（主に大麻）　6. 経鼻　7. その他　8. 不明
（複数選択可）

１３）タバコの喫煙開始年齢　1.（　　）歳　2. 喫煙せず　3. 不明

１４）普段のタバコの喫煙状況　1. 喫煙せず　2. 禁煙中　3. 1日20本以内　4. 1日21本以上　5. 不明

１５）飲酒開始年齢　1.（　　）歳　2. 飲酒せず　3. 不明

１６）初回飲酒時に「コップ１杯のビール」程度で顔が赤くなりましたか？

1. 赤くなった　2. 赤くならなかった　3. これまで飲酒したことがない　4. 不明

１７）普段の飲酒状況（入院期間を除く）　1. 飲酒せず　2. 禁酒中　3. 機会的飲酒（月2～3回以内）　4. 準常用的飲酒（週3回以内）　5. 常用的飲酒（週4回以上）　6. 不明

１８）これまでの乱用的飲酒（健康や社会生活に影響を及ぼすほどの過量の飲酒）の既往の有無

1. あり　2. なし　3. 不明

１９）薬物関連精神疾患に関する精神科治療の開始年齢（他院での治療歴があれば含めて下さい）

1.（　　）歳　2. 不明

２０）入院患者の場合，入院時の入院形態　1. 任意　2. 医療保護　3. 措置　4. その他（　　）

２１）入院患者の場合，調査時点の入院形態　1. 任意　2. 医療保護　3. 措置　4. その他（　　）

２２）薬物の初回使用のきっかけとなった人物（複数選択可）

1. なし（自発的使用）　2. 配偶者　3. 同棲中の相手　4. 恋人・愛人　5. 同性の友人　6. 異性の友人
7. 知人　8. 医師　9. 薬剤師　10. 親　11. 同胞　12. 密売人　13. その他（　　）　14. 不明

２３）薬物の初回使用の動機（複数選択可）

1. 刺激を求めて　2. 好奇心　3. 自暴自棄になって　4. 断りきれずに　5. 覚醒効果を求めて
6. 疲労の除去　7. 性的効果を求めて　8. 「ストレス」解消　9. 不安の軽減　10. 不眠の軽減
11. 疼痛の軽減　12. 咳嗽の軽減　13. その他（　　）

２４）最近１年間における薬物の主な入手経路

1. 最近１年間は使用していない　2. 友人　3. 知人　4. 恋人・愛人　5. 家族　6. 密売人（日本人）
7. 密売人（外国人）　8. 医師　9. 薬局　10. その他（　　）　11. 不明

２５）調査時点におけるICD-10分類による主診断（下のコード表から選択して下さい。次頁の診断ｱﾙｺﾞﾘｽﾞﾑ案も参考に。）

1. ICD-10による主診断：Ｆ１(___). (___)　2. 不明

（例）「有機溶剤」による「精神病性障害」の場合：Ｆ１(8). (5)

＊ICD-10診断コード表

【精神作用物質】

F1(0).x　アルコール
F1(1).x　アヘン類
F1(2).x　大麻類
F1(3).x　鎮静剤あるいは睡眠薬（「抗不安薬」含む）
F1(4).x　コカイン
F1(5).x　カフェインを含む精神刺激剤（「覚せい剤」含む）
F1(6).x　幻覚剤
F1(7).x　タバコ
F1(8).x　揮発性溶剤（「有機溶剤」含む）
F1(9).x　多剤使用および他の精神作用物質（「鎮咳薬」含む）

【状態像】

F1x.(0)　急性中毒
F1x.(1)　有害な使用
F1x.(2)　依存症候群
F1x.(3)　離脱状態
F1x.(4)　せん妄を伴う離脱状態
F1x.(5)　精神病性障害
F1x.(6)　健忘症候群
F1x.(7)　残遺性障害および遅発性の精神病性障害
F1x.(8)　他の精神および行動の障害
F1x.(9)　特定不能の精神および行動の障害

２６）上記設問２５）で「精神病性障害（F1x.5またはF1x.7)」に該当したか，または過去に「精神病性障害」の既往がある場合，その発症年齢は何歳頃でしたか？

1.「精神病性障害」の発症は（　　）歳頃　2. 既往はあるが年齢は不明　3. 既往はない　4. 既往は不明

２７）現在または過去に「覚せい剤」使用による「精神病性障害（F15.5またはF15.7)」のエピソードを有する場合，「精神病エピソード」は薬物使用中断後に最長でどのくらい持続しましたか？

1. １ヶ月以内　2. ２～６ヶ月以内　3. ６ヶ月以上：約（　　）年（　　）ヶ月
4. 既往はあるが持続期間は不明　5. 既往はない　6. 既往は不明

２８）精神疾患の家族歴の有無（薬物関連精神疾患またはその他の精神疾患）

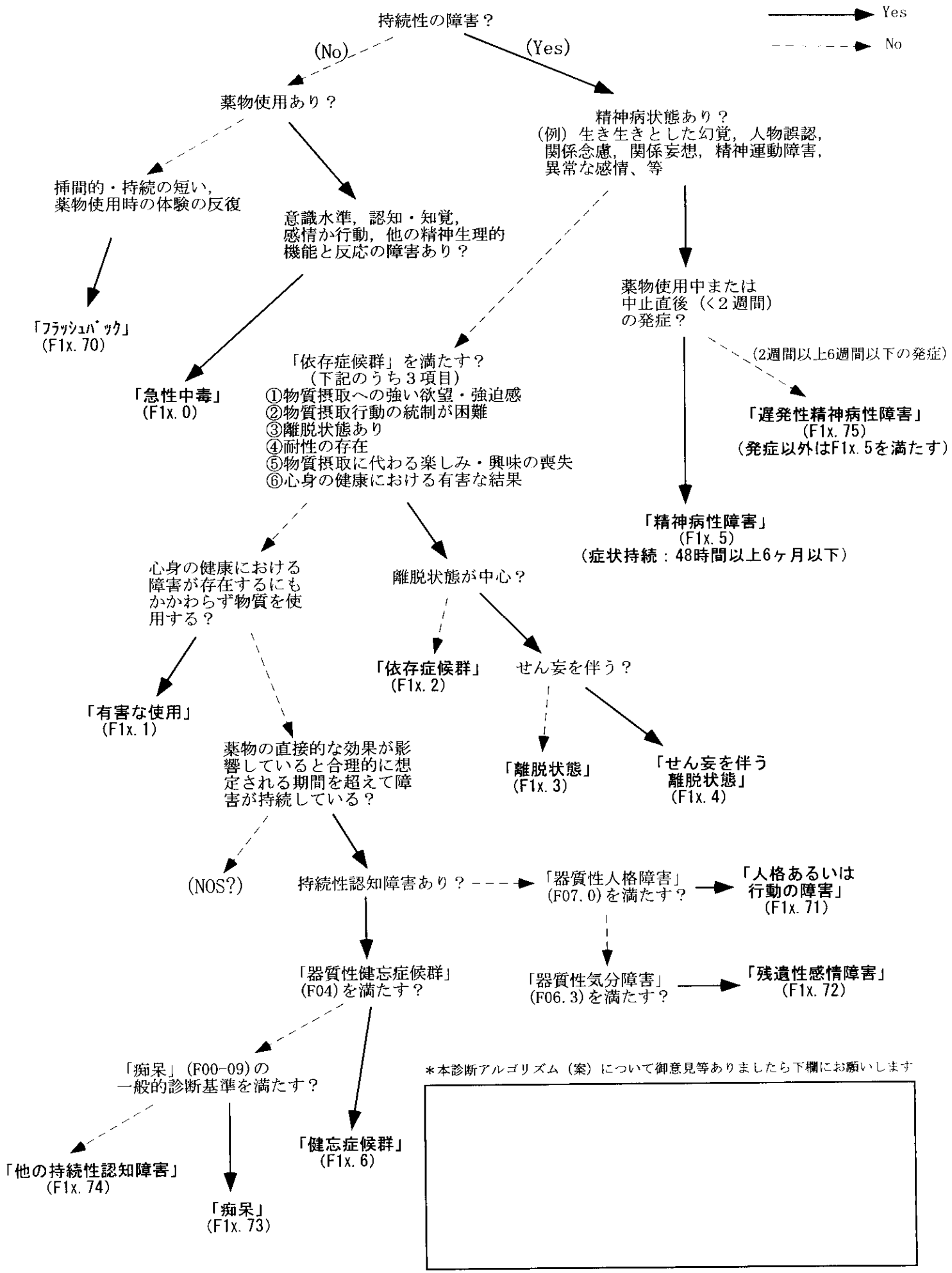
1. なし　2. 父親　3. 母親　4. 同胞　5. 子供　6. 祖父　7. 祖母　8. 父親の同胞　9. 母親の同胞
10. その他（　　）　11. 不明

＊「あり」の場合，その精神疾患名（　　，不明）

２９）その他，御報告いただいた症例について特徴的な点などありましたら，ご教示下さい。

アンケートは以上です。御協力ありがとうございました。

「精神作用物質による精神および行動の障害」ICD-10診断分類のアルゴリズム（案）



＊本診断アルゴリズム（案）について御意見等ありましたら下欄にお願いします

分 担 研 究 報 告 書
(1－3)

平成12年度厚生科学研究費補助金（医薬安全総合研究事業）
分 担 研 究 報 告 書

全国の児童自立支援施設における薬物乱用・依存の意識・実態に関する研究

分担研究者　庄司正実　目白大学人間社会学部
研究協力者　末友　隆　国立武蔵野学院
研究協力者　冨田　拓　国立武蔵野学院
研究協力者　妹尾栄一　東京都精神医学総合研究所
研究協力者　森田展彰　筑波大学社会医学系

研究要旨　この研究の目的は，薬物乱用のハイリスク群である非行児の薬物への意識および実態を把握することである。この目的のため，全国の児童自立支援施設に入所中の児童に質問紙調査を実施した。有効調査人数は，1327人(男性885人，女性442人)であった。調査により以下のような結果が得られた：1)有機溶剤乱用者数は男性234人(26.4%)女性231人(52.0%)，大麻乱用者数は男性44人(5.0%)女性65人(14.7%)，覚醒剤乱用者数は男性44人(5.1%)女性67人(15.1%)，ガス乱用者数男性158人(17.8%)女性147人(33.3%)であった。従来の結果と同様にすべての薬物におにて女性は男性より乱用頻度が高かった。2)平成6年度，平成8年度および平成10年度の児童自立支援施設の調査と比較してみると，以下のような傾向が見られた。有機溶剤乱用は，男性は引き続き減少しているものの女性では減少から増加に転じた。大麻乱用頻度は男女とも平成10年とほぼ変化がなかった。覚醒剤は男性では引き続き増加傾向にあるが，女性ではやや減少した。3)薬物乱用の地域差は，有機溶剤乱用と覚醒剤乱用が関西に多かった。一方，今回初めて調査対象としたガス吸引には地域差が認められなかった。4)従来と同じく乱用者の方が非乱用者よりも薬害知識を有していた。また，女性の方が男性よりも薬害を知っていた。5)薬物乱用者は非乱用者よりも薬物乱用に許容的態度を示していた。また女性は男性よりも薬物乱用に許容的であった。 6)覚醒剤乱用者で，精神病状態を体験したと回答した者は男性15.9%，女性29.9%フラッシュバックを体験した者と回答した者は男性25.0%，女性28.4%であった．いずれも体験しなかったとした者は男性54.5%，女性47.8%であった。7)薬物乱用者では，あらかじめ薬害を知っていてもやはり使用していただろうと考える者が，50%から80%を占めていた。 8)覚醒剤乱用開始の抑制要因として，覚醒剤による脳や体への影響，周囲からの禁止，周囲への配慮，警察による補導，依存状態へのおそれ，経済的理由，の6項目を検討した。その結果，覚醒剤乱用者においても乱用しない方が良いと思っていながら覚醒剤乱用を開始している実態が示された。

児童自立支援施設入所児童は薬物乱用のハイリスクグループであり，施設退所後の薬物乱用を予防することは重要な課題である。しかし，薬物乱用者と非乱用者では薬物乱用への態度が異なるため，それぞれにふさわしい薬物乱用予防対策が必要かもしれない。

A．研究目的

われわれは，平成6年より隔年ごとに児童自立支援施設入所非行児の薬物乱用の実態を全国調査してきた[1,2]。その結果，平成6年から平成10年までの間，児童自立支援施設入所非行児においては有機溶剤乱用者は減少傾向にあるが，覚醒剤乱用者は増加傾向にあることが認められた。この児童自立支援施設入所非行児における薬物乱用の動態の変化は警察白書による薬物乱用検挙少年者数動向と類似している[3]。

しかし，警察白書によれば，平成10年以降覚醒剤乱用検挙少年数は減少傾向にある。実際に検挙されず暗数となっている乱用者も含め少年における覚醒剤乱用が本当に減少しているかどうか把握することは重要である。本調査では，平成10年に

引き続き児童自立支援施設入所非行児の薬物乱用実態を調査することにより非行児の薬物乱用の動態を把握する。

また，ここ数年の覚醒剤乱用少年の増加の原因の一つとして，覚醒剤に対する意識変化が上げられている。そこで，本年度調査で覚醒剤に対する意識調査項目を増やし，その点の検討を試みる。さらに，平成11年の面接調査[4]おいて，従来十分検討していなかったターボライターガスを主体とするガス吸引を経験している少年が多かったことが把握された。ガス吸引は入手が簡単なため，覚醒剤その他の薬物乱用へのゲートウェイドラッグとなっている可能性がある。したがって，本年度より従来の有機溶剤，大麻，覚醒剤に加え，ガス吸引についても実態把握をすることとした。

B．方法

1. 対象

全国57の児童自立支援施設入所児童を対象に、全国の児童自立支援施設に調査用紙を配布した。最終的な調査施設は，49施設であった（84.2%）。分析に用いた対象人数は，1327人(男性885人，女性442人)であった。

2. 調査用紙

調査用紙は資料に示した。従来どおり，調査が今後も同一施設に継続的に実施できるよう，なるべく被調査施設および被調査者の負担にならないように留意した。しかし，本年度は覚醒剤についての意識調査を重視したため，質問項目数は前回より増加した。薬物乱用経験を尋ねる項目は継続比較ができるように質問内容は変更しないようにした。

その結果，最終的に質問項目数は75項目となった（飲酒1項目，有機溶剤9項目，ガス吸引9項目、大麻10項目，覚醒剤21項目，非行歴項目3項目，個人属性その他7項目，刺激希求性尺度15項目)。

回答は無記名式で，もし回答したくない場合は回答しなくても良い旨を質問紙に書き添えた。

調査用紙への回答は，施設ごと集団で実施し，終了後施設ごとに一括して分担研究者に送付してもらった。

表1　性・学年構成

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
小学　4年以下	14	1.5	0	0.0
小学　5年	18	2.0	3	0.7
小学　6年	31	3.5	6	1.4
中学　1年	93	10.5	19	4.3
中学　2年	239	27.0	98	22.2
中学　3年	349	39.6	203	45.8
高校(専門学校)　1年	26	2.9	14	3.2
高校(専門学校)　2年	6	0.7	12	2.7
高校(専門学校)　3年	4	0.5	3	0.7
無職	54	6.1	60	13.6
就労中	11	1.2	9	2.0
無回答ほか	40	4.5	15	3.4
計	885	100.0	442	100.0

表2　施設入所年齢

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
小学　4年	50	5.6	10	2.3
小学　5年	45	5.1	4	0.9
小学　6年	82	9.3	17	3.8
中学　1年	167	18.9	70	15.8
中学　2年	310	35.0	171	38.7
中学　3年	188	21.2	130	29.4
高校(専門学校)	10	1.1	6	1.4
無職中	16	1.8	25	5.7
無回答	13	1.5	8	1.8

表3　地域別人数

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
東北・北海道	106	64.2	59	35.8
関東	226	70.8	93	29.2
中部	92	74.8	31	25.2
関西	257	68.5	118	31.5
中国	63	64.9	34	35.1
四国	41	66.1	21	33.9
九州	68	68.7	31	31.3

表4　非行歴

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
外泊や家出をした	701	79.2	409	92.5
人にけがをさせた	570	64.4	248	56.1
家からお金を持ち出した	587	66.3	327	74.0
自転車を盗んだ	708	80.0	342	77.4
人の物やお金を盗んだ	706	79.8	339	76.7
ひったくり，カツアゲ	470	53.1	244	55.2
家の中で暴れた	370	41.8	203	45.9
暴走族に入った	165	18.6	80	18.1
物や家に火をつけた	288	32.5	112	25.3
学校をさぼった	716	80.9	403	91.2
ﾊﾞｲｸや自動車を盗んだ	505	57.1	218	49.3
人の物やみんなの物をわざと壊した	404	45.6	197	44.6
不良仲間とつき合った	602	68.0	353	79.9
暴力団とつき合った	156	17.6	144	32.6
根性焼きや入墨をした	337	38.1	186	42.1
無免許運転	505	57.1	241	54.5
性関係のこと	260	29.4	302	68.3
その他	163	18.4	88	19.9

表5　初発非行年齢

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
小学校入学前	78	8.8	33	7.5
小学　1年	101	11.4	29	6.6
小学　2年	81	9.2	30	6.8
小学　3年	83	9.4	36	8.1
小学　4年	94	10.6	45	10.2
小学　5年	110	12.4	46	10.4
小学　6年	125	14.1	58	13.1
中学　1年	113	12.8	93	21.0
中学　2年	38	4.3	38	8.6
中学　3年	8	0.9	9	2.0
中学卒業後	2	0.2	4	0.9
無回答	52	5.9	21	4.8

表6　家庭裁判所への係属歴

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
ある	242	27.3	92	20.8
ない	574	64.9	318	71.9
無回答	69	7.8	32	7.2

C．結果

1. 対象者の属性

対象者の，性・学年構成，施設入所年齢，地域別人数，非行歴，初発非行年齢，家庭裁判所係属歴を表１から表6に示した。

性・年齢構成では，男性が885人で全体の66.7%である。就学状況は，中学3年生が男性39.6%，女性45.8%と最も多い。中学生が男性の77.1%，女性の68.9%で多いが，中学卒業後で無職である者も男性6.1%,女性13.6%を占めている。そのほかでは，小学生が男女それぞれ7.0%，2.1%，高校生が男女それぞれ4.1%，6.6%であった(表1)。

施設入所年齢は，男女とも中学2年次が最も多く，それぞれ35.0%，38.7%であり，続いて中学3年生，中学1年生となっている(表2)。

在住地は，北海道・東北，関東，中部，関西，中国，四国，九州・沖縄に分けた。最も人数の少ないのは四国62人，最も多いのは関西375人であった（表3)。

非行歴に関しては多いものから順に，男性では怠学80.9%，自転車盗80. 0%，窃盗79.8%，家出・外泊79.2%，不良交遊68.0%，女性では家出・外泊92.5%，怠学91.2%，不良交遊79.9%，自転車盗77.4%，窃盗76.7%などとなっている(表４)。

初発非行年齢は，男性の方が低い傾向にある。男性の初発非行は小学校6年が14.1%で最も多い。

女性では全体に男性より初発非行が高く，最も多い初発非行年齢は中学1年の21.0%であった(表５)。

家庭裁判所への係属歴は，性差はなく，男性27.3%，女性20.8%である(表６)。

2. 薬物乱用

今回のおもな調査対象薬物は，有機溶剤，ガス，大麻，覚醒剤である。非行児の薬物乱用は，女性に多いため，男女別に検討した．また，薬物への意識は，薬物乱用者と非乱用者で異なると予想されるので両者を分けて分析した。

(1) 薬物乱用の全体の頻度

今回調査対象薬物とした有機溶剤，大麻，覚醒剤，ガスの性別乱用頻度を表７に示した。

すべての薬物で女性は男性よりも乱用頻度が高かった。各薬物とも無回答者が3%から5%前後いる。このため乱用頻度の少ない男性大麻乱用者および男性覚醒剤乱用者では結果の信頼に問題がある。今回ガス乱用を調査対象としたが，乱用者は男性17.8%女性33.3%と有機溶剤乱用に次ぐ高い頻度を示していた。

表７　性別の薬物乱用頻度

		男性		女性		
		人数	%	人数	%	
有機溶剤	乱用	234	26.4	231	52.0	1)
	非乱用	612	69.2	199	45.0	
	無回答	39	4.4	12	2.7	
大麻	乱用	44	5.0	65	14.7	2)
	非乱用	804	90.8	355	80.3	
	無回答	37	4.2	22	5.0	
覚醒剤	乱用	44	5.1	67	15.1	3)
	非乱用	804	90.8	358	81.0	
	無回答	37	4.2	17	3.8	
ガス	乱用	158	17.8	147	33.3	4)
	非乱用	694	78.5	276	62.4	
	無回答	33	3.7	19	4.3	

1) $\chi 2=83.6$, d. f. =1, $p<.01$
2) $\chi 2=37.8$, d. f. =1, $p<.01$
3) $\chi 2=39.8$, d. f. =1, $p<.01$
4) $\chi 2=40.8$, d. f. =1, $p<.01$

(2) 有機溶剤

1) 周囲の有機溶剤乱用者(表8)

身近に有機溶剤乱用をしている人がいたかどうかを訪ねた。

男性の395人(44.6%)，女性の339人(76.7%)が自分の身近に有機溶剤乱用をしている人がいたと回答した。周囲の有機溶剤乱用者は性差があり，女性の周囲において有機溶剤乱用者が多かった($\chi 2=120.6$, d.f.=1, $p<.01$)。

2) 周囲の有機溶剤乱用薬害者(表9)

身近に有機溶剤乱用の結果，病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた。

その結果，男性の124人(14.0%)，女性の168人(38.0%)が身近に有機溶剤乱用の結果と思われる異常を訴えていた人がいたと答えていた。

3) 有機溶剤入手性 (表10)

有機溶剤の入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入るとしたものは，男性では288人(32.5%)，女性では225人(50.9%)であり，女性の方が簡単に手に入るとものが多かった($\chi 2=51.4$, d.f.=3, $p<.01$)。

表8　周囲の有機溶剤乱用者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	395	44.6	339	76.7
いない	471	53.2	98	22.2
無回答	19	2.1	5	1.1

($\chi 2=120.6$, d.f.=1, $p<.01$)

表9　周囲の有機溶剤乱用薬害者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	124	14.0	168	38.0
いない	737	83.3	264	59.7
無回答	24	2.7	10	2.3

($\chi 2=98.7$, d.f.=1, $p<.01$)

表10　有機溶剤入手困難さ

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
簡単に手に入る	288	32.5	225	50.9
少々苦労するが，なんとか手に入る	128	14.5	78	17.6
ほとんど不可能だ	58	6.6	17	3.8
絶対不可能だ	209	23.6	50	11.3
無回答	202	22.8	72	16.3

($\chi 2=51.4$, d.f.=3, $p<.01$)

表11　有機溶剤乱用開始年齢

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
10歳以下	14	6	4	1.7
11歳	14	6	5	2.2
12歳	46	19.7	45	19.5
13歳	94	40.2	92	39.8
14歳	52	22.2	59	25.5
15歳以上	4	1.7	10	4.3
経験はあるが年齢はおぼえていない	10	4.2	16	6.9

($\chi 2=14.2$, d.f.=6, $p<.05$)

4) 有機溶剤乱用開始年齢(表11)

有機溶剤乱用開始年齢は，男女とも中学1年生あるいは中学2年生である13歳が最も多い。続いて14歳，12歳の順となっていた。

5) 有機溶剤吸引頻度(表12)

有機溶剤を最も乱用していた時期の吸引頻度を尋ねた。男女とも，「年に数回」，「月に数回以上」，「ほとんど毎日」がいずれも1/3くらいずつを占めていた。

6)有機溶剤乱用への態度(表13)

この項目は，男女ごとに有機溶剤乱用経験別に比較した。有機溶剤乱用に対して，「法律で禁じられているから，すべきではないと思う」，「法律で禁じられてはいるが，少々ならかまわないと思う」，「法律で禁じられてはいるが，それを守る必要は全然ないと思う」の3件法で回答してもらった。

「法律で禁じられているからすべきではないと思う」と答えた者は，有機溶剤非乱用者では男性418人(68.3%)，女性115人（57.2%）だったのに対し，有機溶剤乱用乱用者では男性45人(19.2%)，女性48人(20.8%)と少なかった。

一方，「少々ならかまわないと思う」，「法律を守る必要は全然ないと思う」という許容的回答をした者は，乱用者では男性185人（79.1%）および女性178人（77.0%），一方，非乱用者では男性144人(23.5%)および女性134人（37.1%）と少なかった。

以上，男女とも乱用者は有意に有機溶剤乱用に許容的であった（それぞれ，$\chi 2=202.6$，d.f.=2，$p<.01$．；$\chi 2=67.9$，d.f.=2，$p<.01$）。

7) 有機溶剤乱用禁止への態度(表14)

法律で有機溶剤乱用を禁止していること自体への意見を尋ねた。「禁止することを当然」としているのは非乱用者では男女それぞれ319人（52.1%），82人（41.2%）であったのに対し，有機溶剤乱用者では「禁止することを当然」とした者は男女とも20%前後にすぎなかった。「有機溶剤くらい禁止しなくても良い」「そもそも法律で決める必要はなく，個人の好きにさせればよい」を合わせ

表12　最もしていた時の有機溶剤乱用頻度

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
1年で数回	82	35.0	61	26.4
月に数回以上	75	32.1	75	32.5
ほとんど毎日	60	25.6	77	33.3
無回答	17	7.3	18	7.8
	($\chi 2=5.2$,	d.f.=2,	p=n.s.)	

表13-1　有機溶剤乱用への態度（男性）

	有機溶剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから，すべきではないと思う	45	19.2	418	68.3
法律で禁じられてはいるが，少々ならかまわないと思う	108	46.2	78	12.7
法律で禁じられてはいるが，それを守る必要は全然ないと思う	77	32.9	66	10.8
無回答	4	1.7	50	8.2
	($\chi 2=202.6$, d.f.=2, $p<.01$)			

表13-2　有機溶剤乱用への態度（女性）

	有機溶剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから，すべきではないと思う	48	20.8	115	57.8
法律で禁じられてはいるが，少々ならかまわないと思う	110	47.6	48	24.1
法律で禁じられてはいるが，それを守る必要は全然ないと思う	68	29.4	26	13.1
無回答	5	2.2	10	5.0
	($\chi 2=67.9$, d.f.=2, $p<.01$)			

た有機溶剤乱用に肯定的意見が，有機溶剤乱用者では，男女それぞれ97人(41.4%)，106人(45.9%)あり，乱用者よりも多かった(男女それぞれ$\chi 2=110.6$，d.f.=3，$p<.01$；$\chi 2=35.9$，d.f.=3，$p<.01$)。

8) 有機溶剤の薬害知識(表15)

有機溶剤乱用の影響として，急性中毒死，多発神経炎，精神病状態，無動機症候群，フラッシュバックについて尋ねた。

これらの薬害については，精神病状態およびフラッシュバックが有機溶剤乱用の有無にかかわらず男女とも良く知られていた。ほとんどの薬害について有機溶剤乱用者の方が，非乱用者よりも有機溶剤の薬害を知っている者が多かった。また，乱用者・非乱用者とも女性の方が男性よりも薬害知識がある傾向にあった。

9) 有機溶剤の薬害知識と乱用抑止(表16)

有機溶剤乱用の有害性の知識が有機溶剤乱用を抑止するかどうかを有機溶剤乱用者に尋ねた。「害を知っていたら吸引しなかったと思う」が男性乱用者では77人(32.9%)，女性乱用者では41人(17.7%)であった。一方，「やはりしていたと思う」は男女乱用者それぞれ140人(59.8%)，179人(77.5%)であった。

表14-1　有機溶剤乱用禁止への態度（男性）

	有機溶剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	51	21.8	319	52.1
しかたないことだと思う	77	32.9	97	15.8
シンナーくらい禁止しなくてもいいのではないかと思う	37	15.8	14	2.3
法律で決める必要はなく，個人の好きにさせればよいと思う	60	25.6	109	17.8
無回答	9	3.8	73	11.9
	($\chi 2=110.6$,	d.f.=3,	$p<.01$)	

表14-2　有機溶剤乱用禁止への態度（女性）

	有機溶剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	47	20.3	82	41.2
しかたないことだと思う	70	30.3	42	21.1
シンナーくらい禁止しなくてもいいのではないかと思う	37	16.0	7	3.5
法律で決める必要はなく，個人の好きにさせればよいと思う	69	29.9	51	25.6
無回答	8	3.5	17	8.5
	($\chi 2=35.9$,	d.f.=3,	$p<.01$)	

表15-1　有機溶剤の薬害知識（男性）

	有機溶剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
急性中毒死	71	30.3	155	25.3
多発神経炎	113	48.3	189	30.9
精神病状態	183	78.2	351	57.4
無動機症候群	85	36.3	151	24.7
フラッシュバック	131	56.0	217	35.5
いずれも知らなかった	24	10.3	168	27.5

1) $\chi 2=2.2$, d.f.=1, n.s.
2) $\chi 2=22.4$, d.f.=1, $p<.01$
3) $\chi 2=31.6$, d.f.=1, $p<.01$
4) $\chi 2=11.4$, d.f.=1, $p<.01$
5) $\chi 2=29.5$, d.f.=1, $p<.01$
6) $\chi 2=28.5$, d.f.=1, $p<.01$

(3) 大麻

1) 周囲の大麻乱用者(表17)

身近に大麻乱用をしている人がいたかどうかを尋ねた。男性の162人(18.3%)，女性の197人(44.6%)が自分の身近に大麻をしている人がいたと答えた．周囲の大麻乱用者は女性においてより高かった($\chi 2=106.1$, d.f.=1, $p<.01$)。

2) 周囲の大麻乱用薬害者(表18)

身近に大麻乱用の結果，病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた。

その結果，男性の51人(5.8%)，女性の70人(15.8%)が身近に大麻乱用の結果と思われる異常を訴えていた人がいたと答えていた。大麻の薬害者も女性の周囲に多かった($\chi 2=35.5$, d.f.=1, $p<.01$)。

3) 大麻入手性 (表19)

大麻の入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入るとしたものは,男性では49人(5.5%)，女性では65人(14.7%)であり，女性の方が簡

表15-2　有機溶剤の薬害知識（女性）

	有機溶剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
急性中毒死	100	43.3	64	32.2 1)
多発神経炎	123	53.2	87	43.7 2)
精神病状態	201	87.0	151	75.9 3)
無動機症候群	132	57.1	72	36.2 4)
フラッシュバック	167	72.3	104	52.3 5)
いずれも知らなかった	8	3.5	29	14.6 6)

1) $\chi 2=5.6$, d.f.=1, $p<.05$
2) $\chi 2=3.9$, d.f.=1, $p<.05$
3) $\chi 2=8.9$, d.f.=1, $p<.01$
4) $\chi 2=18.9$, d.f.=1, $p<.01$
5) $\chi 2=18.4$, d.f.=1, $p<.01$
6) $\chi 2=16.8$, d.f.=1, $p<.01$

表16　有機溶剤の薬害知識と乱用抑止

	男性乱用者		女性乱用者	
	人数	%	人数	%
しなかったと思う	77	32.9	41	17.7
やはりしていたと思う	140	59.8	179	77.5
無回答	17	7.3	11	4.8

($\chi 2=15.7$, d.f.=1, $p<.01$)

表17　周囲の大麻乱用者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	162	18.3	197	44.6
いない	690	78.0	226	51.1
無回答	33	3.7	19	4.3

($\chi 2=106.1$, d.f.=1, $p<.01$)

表18　周囲の大麻乱用薬害者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	51	5.8	70	15.8
いない	719	81.2	320	72.4
無回答	115	13.0	52	11.8

($\chi 2=35.5$, d.f.=1, $p<.01$)

単に手に入るとものが多かった（$\chi 2=70.7$　d. f. =1,　p<.01）。

4）大麻への関心（表20）

「大麻を吸う前（使ったことがない人は施設入所前），大麻についてあなたはどう思っていたか」を尋ねた。「見てみたかった」および「試してみたかった」という大麻乱用への関心を示した者が男性の169人（19.1%），女性の159人（36.0%）を占めており，女性の方が男性より関心が高かった（$\chi 2=56.5$，d. f. =1，p<.01）。

5）大麻の乱用開始年齢（表21）

大麻乱用者に乱用開始年齢を尋ねた。男女とも，乱用者が少なくはっきりした大麻使用開始年齢のピークは判断しがたいが，13歳から14歳が開始年齢として多い。

表19　大麻入手性

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
簡単に手に入る	49	5.5	65	14.7
少々苦労するが，なんとか手に入る	140	15.8	123	27.8
ほとんど不可能だ	126	14.2	46	10.4
絶対不可能だ	359	40.6	114	25.8
無回答	211	23.8	94	21.3

（$\chi 2=70.7$　d. f. =1，p<.01）

表20　大麻への関心

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
知らなかった	276	31.2	78	17.6
関心がなかった	385	43.5	182	41.2
見てみたかった	85	9.6	68	15.4
試してみたかった	84	9.5	91	20.6
無回答	55	6.2	23	5.2

（$\chi 2=56.5$，d. f. =3，p<.01）

表21　大麻乱用開始年齢

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
10歳以下	6	13.6	1	1.5
11歳	.	.	2	3.1
12歳	6	13.6	3	0.0
13歳	15	34.1	34	52.3
14歳	12	27.3	17	26.2
15歳	2	4.6	3	4.6
経験はあるが年齢はおぼえていない	3	6.8	5	7.7

（$\chi 2=11.9$，d. f. =6，p=n. s.）

表22　大麻の乱用頻度

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
1年で数回	25	56.8	33	50.7
月に数回以上	6	13.6	22	30.8
ほとんど毎日	8	18.2	8	12.3
無回答	5	11.4	4	6.2

（$\chi 2=4.0$，d. f. =2，p=n. s.）

6) 大麻の乱用頻度(表22)

大麻乱用経験者に最も吸引していた時期の吸引頻度を尋ねた。男女とも半数以上は年に数回程度の使用頻度であった。一方，ほとんど毎日乱用していたことがある者が性8人(18.2%)女性8人(12.3%)みられた。

7) 大麻への態度(表23)

大麻を吸うことをどう思っていたかを大麻乱用の有無で比較した。大麻非乱用者は，男性571人(71.0%)，女性198人(55.8%)が，「法律で禁じられているからすべきではないと思う」と答えていた。

一方，大麻乱用者では，「すべきではない」とした者が男女ともに10%台に過ぎなかった。 大麻乱用者では「少々ならかまわないと思う」「それを守る必要は全然ない」をあわせた大麻乱用に肯定的意見が男性で36人(81.8%)，女性で55人(84.6%)を占めいた。

8) 大麻禁止への態度(表24)

法律で大麻を禁止していること自体への意見を尋ねた。有機溶剤乱用の場合と同様，非乱用者は，「禁止することを当然」としとするものが多いのに対し，大麻乱用者では「禁止することを当然」とした者は少なかった(男女それぞれ$\chi 2=80.6$, d.f.=3, $p<.01$; $\chi 2=32.6$, d.f.=3, $p<.01$)。「大麻くらい禁止しなくても良い」「そもそも法律で決める必要はなく，個人の好きにさせればよい」など大麻吸引に肯定的意見が，大麻乱用者では男女それぞれ52.2%，46.1%を占めていた。

9) 大麻の薬害知識(表25)

大麻吸引の影響として，精神病状態，無動機症候群について尋ねた。いずれも大麻乱用者の方が，非乱用者よりも大麻の有害性を知っている頻度が高かった。大麻非乱用者では「いずれも知らなかった」者が男性では500人(62.2%)，女性168人(47.3%)であり，大麻については薬害を知らない者が多かった(男女それぞれ$\chi 2=7.9$, d.f.=1, $p<.05$. ; $\chi 2=10.0$, d.f.=1, $p<.01$)。乱用経験の有無にかかわらず女性は男性よりも薬害知識があった。

表23-1　大麻への態度(男性)

	大麻乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから，すべきではないと思う	8	18.2	571	71.0
法律で禁じられてはいるが，少々ならかまわないと思う	22	50.0	108	13.4
法律で禁じられてはいるが，それを守る必要は全然ないと思う	14	31.8	67	8.3
無回答			58	7.2

($\chi 2=72.3$, d.f.=2, $p<.01$)

表23-2　大麻への態度(女性)

	大麻乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから，すべきではないと思う	8	12.3	198	55.8
法律で禁じられてはいるが，少々ならかまわないと思う	36	55.4	95	26.8
法律で禁じられてはいるが，それを守る必要は全然ないと思う	19	29.2	32	9.0
無回答	2	3.1	30	8.5

($\chi 2=51.9$, d.f.=2, $p<.01$)

表24-1　大麻禁止への態度(男性)

	大麻乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	7	15.9	490	60.9
しかたないことだと思う	13	29.5	124	15.4
大麻くらい禁止しなくてもいいのではないかと思う	10	22.7	16	2.0
法律で決める必要はなく，個人の好きにさせればよいと思う	13	29.5	113	14.1
無回答	1	2.3	61	7.6

($\chi 2=80.6$, d.f.=3, $p<.01$)

10) 大麻の薬害知識と抑止(表26)

大麻吸引の有害性の知識が大麻吸引を抑止するかどうかを検討するため，大麻による害を知っていたら吸引しなかったと思うかどうか尋ねた。「害を知っていたら吸引しなかったと思う」と答えた大麻乱用者は，男女それぞれ9人(20.5%)，9人(13.6%)にすぎず，「やはりしていたと思う」と答えた者が多かった。

(4) 覚醒剤

1) 周囲の覚醒剤乱用者 (表27)

周囲の覚醒剤乱用者は性差が大きく，周囲に覚

表24-2　大麻禁止への態度(女性)

	大麻乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	10	15.4	151	42.5
しかたないことだと思う	23	35.4	101	28.5
大麻くらい禁止しなくてもいいのではないかと思う	11	16.9	12	3.4
法律で決める必要はなく，個人の好きにさせればよいと思う	19	29.2	61	17.2
無回答	2	3.1	30	8.5

($\chi 2=32.6$, d.f.=3, $p<.01$)

表25-1　大麻の薬害知識(男性)

	大麻乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
精神病状態	20	45.5	257	32.0
無動機症候群	18	40.9	144	17.9
いずれも知らなかった	20	45.5	500	62.2

1) $\chi 2=3.5$, d.f.=1, n.s.
2) $\chi 2=14.3$, d.f.=1, $p<.01$
3) $\chi 2=7.9$, d.f.=1, $p<.05$

表25-2　大麻の薬害知識(女性)

	大麻乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
精神病状態	41	63.1	155	43.7
無動機症候群	37	56.9	95	26.8
いずれも知らなかった	17	26.2	168	47.3

1) $\chi 2=8.3$, d.f.=1, $p<.01$
2) $\chi 2=23.2$, d.f.=1, $p<.01$
3) $\chi 2=10.0$, d.f.=1, $p<.01$

表26　大麻の薬害知識と抑止

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
しなかったと思う	9	20.5	9	13.9
やはりしていたと思う	30	68.2	52	80.0
無回答	5	11.3	4	6.1

($\chi 2=1.1$, d.f.=2, p=n.s.)

表27　周囲の覚醒剤乱用者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	142	16.0	223	50.5
いない	703	79.4	199	45.0
無回答	40	4.5	20	4.5

($\chi 2=178.2$, d.f.=1, $p<.01$)

醒剤乱用者がいたと答えたものは男性142人(16.0%)，女性233人(50.5%)であった($\chi 2=178.2$, d.f.=1, $p<.01$)。

2) 周囲の覚醒剤薬害者(表28)

身近に覚醒剤乱用の結果，病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた。

その結果，男性の53人(6.0%)，女性の106人(24.0%)が身近に覚醒剤乱用の結果と思われる異常を訴えていた人がいたとしており，女性の周囲に有意に薬害者が多かった($\chi 2=88.2$, d.f.=1, $p<.01$)。

3) 覚醒剤入手性(表29)

覚醒剤の入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入るとした者は，男性では55人(6.2%)，女性では87人(19.7%)，また少々苦労するが手に入ると答えた者が男性130人(14.7%)，女性124人(28.1%)であり，女性の方が簡単に手に入るとする者が多かった($\chi 2=114.8$, d.f.=3, $.<.01$)。

4) 覚醒剤への関心(表30)

「覚醒剤を使う前(使ったことがない人は施設入所前)，覚醒剤についてどう思っていたか」を尋ねた。「見てみたかった」および「試してみたかった」という覚醒剤への関心を示した者が男性の168人(19.0%)，女性の190人(43.0%)を占めた。女性は男性よりも覚醒剤乱用以前から覚醒剤への関心が高かった($\chi 2=118.5$, d.f.=3, $p<.01$)。

表 28　周囲の覚醒剤薬害者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	53	6.0	106	24.0
いない	698	78.9	280	63.4
無回答	133	15.1	56	12.6

($\chi 2 = 88.2$, d.f.=1, $p<.01$)

表 29　覚醒剤の入手性

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
簡単に手に入る	55	6.2	87	19.7
少々苦労するが，なんとか手に入る	130	14.7	124	28.1
ほとんど不可能だ	112	12.7	56	12.7
絶対不可能だ	377	42.6	91	20.6
無回答	211	23.8	84	19.0

($\chi 2 = 114.8$, d.f.=3, $p<.01$)

表 30　覚醒剤への関心

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
覚醒剤は知らなかった	179	20.2	32	7.2
関心がなかった	485	54.8	192	43.4
見てみたかった	105	11.9	80	18.1
試してみたかった	63	7.1	110	24.9
無回答	53	6.0	28	6.3

($\chi 2 = 118.5$, d.f.=3, $p<.01$)

表 31　覚醒剤乱用への誘い

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
ある	120	13.6	188	42.5
ない	612	69.2	196	44.3
無回答	153	17.3	58	13.1

($\chi 2 = 133.7$, d.f.=1, $p<.01$)

5) 覚醒剤乱用への誘い(表31)

「入所前，覚醒剤の使用を誘われたことがあるかどうか」を尋ねた。男性では120人(13.6%)，女性では188人(42.5%)が覚醒剤乱用に誘われていた($\chi 2=133.7$, d.f.=1, $p<.01$)。この質問項目では無回答が男女それぞれ153人(17.3%)，58人(13.1%)と多いためその点を考慮する必要がある。

6) 覚醒剤の乱用開始年齢(表32)

覚醒剤乱用者にはじめて覚醒剤を乱用した年齢を尋ねた。乱用開始年齢は，男女ともおよそ13歳から14歳がピークであり，有機溶剤乱用より若干年齢が高いようである。

7) 覚醒剤の乱用頻度(表33)

覚醒剤乱用者が最も乱用していた時期にどの程度の乱用していたかを尋ねた。男女とも「年に数回」が全体の半分を占めている。ほとんど毎日乱用していたことがあると答えた者は，男性4人(9.1%)，女性7人(10.5%)であった。乱用頻度には性差は見られなかった($\chi 2=0.3$, d.f.=2, p=n.s.)。ただし，この質問項目でも無回答が男女それぞれ9人(20.5%)，5人(7.5%)と多いため信頼性は乏しい。

8) 覚醒剤の乱用方法(表34)

乱用方法を「吸引」「注射」「吸引と注射」に分けて尋ねた。吸引のみを乱用方法としてあげた者が男女それぞれ16人(36.4%)30人(44.7%)と最も多かった。古典的使用法である注射のみをあげた者は男女それぞれ10人(22.7%)，14人(20.9%)であった。乱用方法は乱用頻度と同様に性差は認められなかった($\chi 2=0.5$, d.f.=2, p=n.s.)。

9) 覚醒剤への態度(表35)

この項目は，男女別，覚醒剤乱用経験別に比較した。覚醒剤乱用者は，非乱用者よりも「すべきではない」とした者が少なく，「少々ならかまわないと思う」「それを守る必要は全然ない」など覚醒剤乱用に肯定的意見が多かった(男女それぞ

表32　覚醒剤乱用開始年齢

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
10歳以下	3	6.8	1	1.5
11歳	1	2.3	1	1.5
12歳	6	13.6	6	9.0
13歳	12	27.3	28	41.7
14歳	12	27.3	16	23.9
15歳	5	11.4	8	11.9
経験はあるが年齢はおぼえていない	5	11.4	7	10.5

($\chi 2=4.4$, d.f.=6, p=n.s.)

表33　覚醒剤乱用頻度

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
1年で数回	22	49.9	36	53.6
月に数回以上	9	20.5	19	28.4
ほとんど毎日	4	9.1	7	10.5
無回答	9	20.5	5	7.5

($\chi 2=0.3$, d.f.=2, p=n.s.)

表34　覚醒剤の乱用方法

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
吸引	16	36.4	30	44.7
注射	10	22.7	14	20.9
吸引と注射	10	22.7	20	29.9
無回答	8	18.2	3	4.5

($\chi 2=0.5$, d.f.=2, p=n.s.)

れ$\chi 2=39.9$, d. f. =2, p<.01 ; $\chi 2=35.5$, d. f. =2, p<.01)。

10) 覚醒剤禁止への態度(表36)

法律で覚醒剤を禁止していること自体への意見を尋ねた。「そもそも法律で決める必要はなく，個人の好きにさせればよい」という覚醒剤使用に肯定的意見は,覚醒剤非乱用者では男性114人(14.2%)，女性68人(19.0%)ほどにすぎなかったが，乱用者では男性13人(29.5%),女性27人(40.3%)が覚醒剤使用に肯定的意見であった。

11) 覚醒剤の薬害知識(表37)

覚醒剤吸引の影響として，精神病状態，フラッシュバックについて尋ねた。いずれも覚醒剤乱用者の方が，非乱用者よりも薬害を知っている頻度が高かった。また全体に女性は男性よりも覚醒剤吸引の影響を知っているものが多かった。いずれの薬害も知らなかったとする者は，男女とも乱用者では少なく，非乱用者で多かった（男女それぞれ，$\chi 2=7.8$, d. f. =1, p<.01 ; $\chi 2=6.7$, d. f. =1, p<.01)。覚醒剤乱用者でも，いずれの薬害も知らなかった者が男性12人(27.3%),女性10人(14.9%)いた。

表35-1　覚醒剤への態度（男性）

	覚醒剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから，すべきではないと思う	15	34.1	582	72.4
法律で禁じられてはいるが，少々ならかまわないと思う	17	38.6	118	14.7
法律で禁じられてはいるが，それを守る必要は全然ないと思う	11	25.0	55	6.8
無回答	1	2.3	49	6.1

($\chi 2=39.9$, d. f. =2, p<.01)

表35-2　覚醒剤への態度（女性）

	覚醒剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから，すべきではないと思う	15	22.4	203	56.7
法律で禁じられてはいるが，少々ならかまわないと思う	30	44.8	97	27.1
法律で禁じられてはいるが，それを守る必要は全然ないと思う	20	29.9	35	9.8
無回答	2	3.0	23	6.4

($\chi 2=35.5$, d. f. =2, p<.01)

表36-1　覚醒剤禁止への態度（男性）

	覚醒剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	15	34.2	520	64.7
しかたないことだと思う	14	31.8	121	15.0
法律で決める必要はなく，個人の好きにさせればよいと思う	13	29.5	114	14.2
無回答	2	4.5	49	6.1

($\chi 2=19.8$, d. f. =2, p<.01)

表36-2　覚醒剤禁止への態度（女性）

	覚醒剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	17	25.4	177	49.4
しかたないことだと思う	20	29.9	87	24.3
法律で決める必要はなく，個人の好きにさせればよいと思う	27	40.3	68	19.0
無回答	3	4.5	26	7.3

($\chi 2=18.9$, d. f. =2, p<.01)

12) 覚醒剤の薬害体験率(表38)

覚醒剤乱用者に，精神病状態，フラッシュバックの体験ついて尋ねた。精神病症状を体験したことがある者は男女それぞれ7人(15.9%)，20人(29.9%)，フラッシュバックを体験したことがある者は男女それぞれ11人(25.0%)，19人(28.4%)であった。

いずれの覚醒剤薬害を体験していない者は男女それぞれ24人(54.5%)，32人(47.8%)であり，乱用者のおよそ半数が何らかの精神症状を経験していた。

13) 覚醒剤薬害知識と乱用抑止(表39)

覚醒剤薬害知識が覚醒剤吸引を抑止するかどうかを覚醒剤乱用者に尋ねた。「害を知っていたら吸引しなかったと思う」が男性10人(22.7%)，女性10人(14.9%)であった。「やはりしていたと思う」とする者が，男性で23人(52.3%)，女性で50人(74.6%)いた。

14) 覚醒剤薬害に関する教育ビデオ（表40)

今回の調査では，覚醒剤乱用開始に関連すると思われるいくつかの要因について尋ねた。

まず，覚醒剤についての教育ビデオを見た経験を尋ねた。乱用者ではビデオを見たものが男女37人(84.1%)，41人(61.4%)であった。非乱用者では

表37-1　覚醒剤の薬害知識（男性）

	覚醒剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
精神病状態	24	54.5	320	39.8[1]
フラッシュバック	25	56.8	259	32.2[2]
いずれも知らなかった	12	27.3	393	48.9[3]

1)　$\chi 2 = 3.8$, d.f.=1, n.s.
2)　$\chi 2 = 11.3$, d.f.=1, $p < .01$
3)　$\chi 2 = 7.8$, d.f.=1, $p < .01$

表37-2　覚醒剤の薬害知識（女性）

	覚醒剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
精神病状態	48	71.6	217	60.6[1]
フラッシュバック	45	67.2	190	53.1[2]
いずれも知らなかった	10	14.9	109	30.4[3]

1)　$\chi 2 = 2.9$, d.f.=1, p=n.s.
2)　$\chi 2 = 4.5$, d.f.=1, $p < .05$
3)　$\chi 2 = 6.7$, d.f.=1, $p < .01$

表38　覚醒剤の薬害体験率

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
精神病状態	7	15.9	20	29.9
フラッシュバック	11	25.0	19	28.4
いずれも体験しなかった	24	54.5	32	47.8

表39　覚醒剤の薬害知識と抑止

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
使わなかったと思う	10	22.7	10	14.9
やはり使ったと思う	23	52.3	50	74.6
無回答	11	25.0	7	10.5

($\chi 2 = 2.3$, d.f.=1, p=n.s.)

男女それぞれ421人(52.4%)，209人(58.4%)であった。非乱用者では男女差はないが，乱用者では男性のほうが覚醒剤ビデオを見ているものが多い（$\chi 2=28.6$，d.f.=4，$p<.01$）。

ビデオを見た者のうち，ビデオを見た感想として「怖いと思った」「少し怖いと思った」者が覚醒剤乱用者の男性では16人(34.0%)，女性では23人(56.1%)，非乱用者の男性では281人(66.7%)，女性では133人(63.6%)であった。

15）覚醒剤薬害知識と乱用開始行動（表41）

「覚醒剤を使う前(使ったことがない人は施設入所前)，体や脳に害があるから覚醒剤は使用しないほうが良いと思っていましたか」を尋ねた。

「害があるから覚醒剤は使用しないほうが良いと思っていた」が男女とも非乱用者が乱用者よりも多い(男女それぞれ$\chi 2=22.8$，d.f.=4，$p<.01$；$\chi 2=20.3$，d.f.=4，$p<.01$)。乱用者の内わけでは，男性の18人(40.9%)，女性の20人(35.8%)が「思っていなかった」「あまり思っていなかった」「害について考えたことはなかった」としており，体や脳への害を考慮していなかった。

16）周囲からの禁止と乱用開始行動（表42）

「覚醒剤を使う前(使ったことがない人は施設入所前)，家族・仲間・つきあっている人などから禁止されていたので覚醒剤は使用しないほうが良いと思っていましたか」を5件法で尋ねた。

男女とも乱用者と非乱用者の間で回答に頻度に有意差があった（男女それぞれ$\chi 2=62.7$，d.f.=4，$p<.01$；$\chi 2=39.3$，d.f.=4，$p<.01$)。男女とも，乱用者は非乱用者よりも「人から禁止されていた

表40-1　覚醒剤についてのビデオを見た経験(男性)

	覚醒剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
ビデオを見てとても怖いと思った	9	20.5	160	19.9
ビデオを見て少し怖いと思った	7	15.9	121	15.0
ビデオを見たがあまり怖いと思わなかった	10	22.7	62	7.7
ビデオを見たがぜんぜん怖いと思わなかった	11	25.0	78	9.7
覚醒剤のビデオは見ていない	7	15.9	371	46.1
無回答			12	1.5

（$\chi 2=28.6$，d.f.=4，$p<.01$）

表40-2　覚醒剤についてのビデオを見た経験(女性)

	覚醒剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
ビデオを見てとても怖いと思った	8	11.9	66	18.4
ビデオを見て少し怖いと思った	15	22.4	67	18.7
ビデオを見たがあまり怖いと思わなかった	5	7.5	39	10.9
ビデオを見たがぜんぜん怖いと思わなかった	13	19.4	37	10.3
覚醒剤のビデオは見ていない	25	37.3	144	40.2
無回答	1	1.5	5	1.4

（$\chi 2=6.5$，d.f.=4，p=n.s.）

表41-1　覚醒剤薬害知識と乱用開始行動(男性)

	覚醒剤乱用			
	経験有		経験無	
	人数	%	人数	%
思っていた	16	36.4	470	58.5
少し思っていた	9	20.5	72	9.0
あまり思っていなかった	7	15.9	36	4.5
思っていなかった	5	11.4	39	4.9
害について考えたことはなかった	6	13.6	137	17.0
無回答	1	2.3	50	6.2

（$\chi 2=22.8$，d.f.=4，$p<.01$）